

I. 作詩者チャールズ・ウェスレー

1. 出生から叙階まで(1707-1735 年)

英語圏最高の讃美歌作者の一人と称されるチャールズ・ウェスレー(Charles Wesley、1707-1788)はサミュエルとスザンナ・ウェスレー夫妻 18 人目の子、末息子として生まれました(うち成人したのは 10 人)。父親は経済的管理能力に欠け家庭は常に貧しかったものの、両親ともに高い教養と深い信仰心を持ち、彼は母親から聖書だけでなくラテン語、ギリシャ語、フランス語などの厳格な基礎教育を自宅で受けました。

1716 年にロンドンの名門ウェストミンスター学校(中高一貫の私立学校)に入学、王の特待生として学び主席で卒業しました。そして 1726 年、オックスフォード大学クライスト・チャーチに推薦入学し、1729 年には規律正しいキリスト教生活を実践するサークル「聖潔会(ホーリー・クラブ)」を学友たちと結成し、その厳格なメソッド(規則)から「メソジスト」という名称が生まれました。1730 年、学士号取得後はチューターとして後進の指導にあたり、1733 年には文学修士号(M.A.)を取得しています。

2. アメリカ伝道での挫折と「回心」(1735-1738 年)

1735 年、ウェスレー兄弟はジョージア植民地総督の要請により、執事および司祭としての按手を受けインディアン(先住民)伝道と植民地居住者牧会のために新大陸へ渡ったことが後の回心につながりました。

(1) モラビア兄弟団(モラヴィア派)信徒との出会い

1735 年 10 月、大西洋航海中に船が猛烈な嵐に襲われ、誰もが恐怖に慄きパニックに陥りました。しかし同船のモラビア兄弟団の信徒たちは全く動じず、ただ静かに、そして力強く讃美歌を歌い続けていたのです。このパウロ難船の出来事(使徒 27-28 章)と重なる彼らの姿を見て、「自分には死の恐怖に打ち勝つ信仰がないのではないか」と自問し始めました。

(2) 「大いなる挫折」

ウェスレー兄弟の徹底した戒律主義は、自由な生活を望む植民地移民たちから強い反発を買い活動は困難を極め、心身ともに極度に衰弱したチャールズは着任からわずか数ヶ月後にジョージアを去りました。兄ジョンは 1738 年に帰国しました。彼らの博学と豊かな聖書知識、善行の積み重ねは、I コリント 13 章の「鳴るシンバル」やマタイ 7 章の「砂上の楼閣」の如くだったのです。

(3) 運命的出会い

植民地伝道に挫折し失意のどん底にあったウェスレー兄弟は、1738 年 2 月 7 日にモラビア兄弟団の指導者ペーター・ベーラー(Petrus Bohler、1712-1775)と出会い、チャールズはベーラーに英語を教え、ベーラーはウェスレー兄弟に、「理性的理解や行いではなくキリストへの信仰のみによる救いと回心」を説きました。やがてチャールズは重い胸膜炎を患い死をも意識します。その時彼を見舞ったベーラーが問いかけます。「永遠の救いの望みはあるか」「神に仕えるために最善の努力を尽くしてきた」。しかし、ベーラーは首を横に振りました。これが後に「チャールズは英語を教え、教え子(ベーラー)は師にそれよりも高次なもの(信仰)を教えた」と評されました。ベーラーが英国を離れた後は、モラビア兄弟団の仲間たちが看病を続けました。

(4) 回心 1738 年 5 月 21 日(ペンテコステの日)

その日の朝もベッドで精神的・肉体的苦痛に苦しんでいたチャールズは、「キリストの名において命じる、起きて信じよ」という不思議な声を耳にします(実際には看病注の女性が霊的な促しを受けて発した言葉でした)。この瞬間、彼の心にキリストへの真の信仰と深い平安が与えられ回心を経験したのです。

M.ルターの宗教改革と一連のモラビア兄弟団による影響がなければ、この讃美歌は生まれませんでした。

Ⅱ. 讃美歌「O For a Thousand Tongues To Sing」

1. 歌詞創作と初出版(1739, 1740 年)

チャールズの讃美歌創作の歴史は回心直後から始まりました。そして回心から丁度一年後の 1739 年 5 月 21 日、「For the Anniversary Day of One's Conversion (ある人の回心の記念日のために)」と題して、彼自身の深い回心体験から始まり救いの普遍的な広がりに至る壮大な信仰の旅路を歌う全 18 節からなる詩を書き上げました(資料3)。この詩は 1740 年、ウェスレー兄弟が出版した讃美歌集『Hymns and Sacred Poems (讃美歌と聖なる詩)』(初版)に収録されました。

2. 個人的回心記念の歌から、会衆全員の讃美歌への転換(1753 年, 1780 年)

当時の英国国教会では、会衆讃美にもっぱら詩編歌を用いて会堂で厳かに礼拝をしていました。ところがメソジスト運動は形式ばらず、礼拝に建物や座席も必要なく、人々は街頭や野外、刑務所などで喜びを爆発させ情熱的に讃美しました。ところが、個人的回心を歌う讃美や感情を揺さぶる伝道スタイルは、「理性を欠いた危険な熱狂主義・異端であり、礼拝の秩序を乱すもの」として厳しい批判と妨害に曝されました。

しかし兄ジョンは逆風に怯むことも体制派に付度もせず、「如何にして全会衆がキリストによる贖いと恵みの勝利に集中し、心をつ一つにして福音の喜びを力強く歌えるか」を追求しました。そこで、

①原詩全 18 節から個人的回心描写の強い節等を省略し、

②モラヴィア兄弟団宣教師ベーラーの言葉「もし私に千の舌があれば、それらすべてでキリストを賛美するのに」に着想を得た原歌詞第 7 節「O for a thousand tongues to sing...」を先頭(第 1 節)に配置し、

③歌いやすく福音的神学的メッセージが凝縮された第 7-13 節、第 15-18 節が抜粋され(全 11 節)、讃美歌集『Hymns and Spiritual Songs』(1753 年版)に収録されました。

そして 1780 年、この讃美歌の「神の豊かな恵みと救いを、ありったけの声(千の舌)で世界中に宣べ伝えたい」との情熱は彼らの活動を象徴し、しかも霊的成長プロセス(回心から聖化)に沿い体系化する編集方針とも合致したことから、メソジスト公式歌集『A Collection of Hymns for the Use of the People Called Methodists』(メソジストと呼ばれる人々のための讃美歌集)の巻頭に収録(全 10 節)され不動の地位を築きました。

3. 現代の定番メロディ「AZMON」との融合(1839 年)

「O For a Thousand Tongues To Sing」の最も一般的なメロディは「アズモン」(AZMON)と呼ばれます。

1839 年、「アメリカ教会音楽の父」と呼ばれるローウェル・メイスン(Lowell Mason)は、

- ・ドイツの作曲家グレイサー(Carl Gotthelf Glaser、1784-1829)が 1828 年に作曲した原曲を編曲し、
- ・民数記 34:4-5 やヨシュア 15:4 に登場する約束の地の南境界線上の町の名「AZMON」を曲名とし、
- ・原詩全 18 節とメロディーを融合させ『The Modern Psalmist』(ザ・モダン・サールミスト)で出版しました。

これにより、標準的メロディとして「アズモン」が定着しましたが、歌詞はメソジスト教会公式讃美歌集としての地位を築いた 1780 年版(全 10 節)をさらに短縮したり「現代的な言葉に修正」した歌詞も普及しています。

※ AZMON が定着する迄の歌唱メロディーについては資料4「コモン・メーター」をご参照下さい。

4. 受容とさらなる改訂

やがてウェスレーらを批判していた英国国教会側もその音楽性と信仰を認め、「O For a Thousand Tongues To Sing」は公式歌集『古今聖歌集(Hymns Ancient and Modern)』初版に収録されました(1861 年)。

その後様々な讃美歌委員会による編集過程で、各時代の礼拝にふさわしい普遍的な内容(讃美や救いの喜び)が優先され 4 ～ 7 節に圧縮されました。しかし 20 世紀になると、削除されていた原詩第 1 節("Glory to God...")が再評価され、讃美歌の伝統とウェスレーの神学的意図を尊重するため、讃美歌の締めくくりの最終節として復活しました。

その結果、現行の第 2 節と相俟って、この讃美歌は信徒が神を讃えつつ日常生活に遣わされる喜びと決意を歌う内容となり、教派を超えて世界中で愛唱されています。

以上